

秋詠集

よ
し
こ

長き夏休み終りて、組の幼児とあふ

のびおそき子とし見えしが久々にきく言の葉はなみくならず
ふとしたる舉動に見し聰きこゝろ今日にして漸くに知る
一學期泣きをつゞけし子はわれに心馴寄りても物語らんとす

叢に蟲を追ふ

一つ蝶追ひて及ばず追ひ遠く駈けめぐる子に陽はさかりなり
魂あひの友も一とき友ならずくさむらに蟲をしきり追ふむれ
とまる蟲に及びなんとし子の寄ればほろよこぼれぬ白萩の花
この道を歸り急ぐに木せいの香はたゞよへり郊外による
大き息してしばしを立てり木せいの香のたゞよへる歸り夜の道
このみにて植えたるはみな木なり秋庭は雁來紅の朱もあるべし

あ
る
と
き

寝てがてに夜半書きつゞればあやしくも筆のすゝみのこの時早き
身疲れレコードきけば遠の家に同じ音のせり郊外の秋